

林木育種に関する国際会議等への参加

1. 国際会議への参加

令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、林木育種センターが参加した国際会議はすべてオンラインでの開催でした。今回参加した3つの国際会議の概要をお伝えし、林木育種に関し話題になった事項等について紹介します。

2. 食料及び農業のための遺伝資源委員会 (CGRFA: Commission on Genetic Resources for Food and Agriculture)

本委員会は、植物遺伝資源について取り扱う委員会としてFAOに設置されています。2021年9月27日～10月1日まで開催された第18回通常会合では、気候変動の緩和及び適応のための食料農業遺伝資源の役割、食料農業遺伝資源のアクセスと利益配分及び生物多様性などについて議論されました。

森林遺伝資源分野では、森林遺伝資源の保全、持続的利用・発展のための世界行動計画の実施及び世界森林遺伝資源白書第2版の作成の準備について議論され、世界行動計画については、森林遺伝資源に関する新たなグローバル情報システムの開発と試行を進めるとともに、データの供与の推奨が各国に求められました。また、白書第2版については、世界行動計画の実施のレビューを踏まえ作成され、2023年に公表する予定となっており、その進捗について確認されました。

3. 学会での成果発表と情報収集

(1) オーストラレイシアン種子科学会議 (ASSC 2021: Australasian Seed science Conference)

本会議は、植物の保全と食糧生産における種子科学の重要性に焦点を当て、研究者・技術者がアイデアを共有する機会として企画された国際会議で、「Linking seeds with needs: securing future in a changing world」(ニーズに応えるシーズ(種子)を。変わりゆく世界の未来を拓く(林

木育種センター仮訳))のテーマのもと2021年9月6～10日に開催されました。種子科学、利用、シードバンク管理、文化の各セッションに基づき多様な発表がなされました。なかでも、難貯蔵種子の保存は世界的な課題であり、日本を含む温帯域のコナラ属では液体窒素での凍結保存技術が確立しつつあること、またこうした種の遺伝的多様性の確保には花粉の保存が重要という興味深い報告がありました。当方からは「琉球列島に自生する樹木種の種子特性」について発表しました。

(2) 東アジア生態学連合 (EAFES2021: East Asian Federation of Ecological Societies)

東アジア生態学連合は、中国・韓国・日本の3つの生態学会の連合で、3国の生態学会が相互に連携して、共通の問題に取り組むことを目的としています。第1回は2004年に韓国で開催され、その後、定期的に2年に1回実施されています。2021年7月10～13日開催された今大会では「人と自然が調和するより良いアジアをめざして」をテーマに開催されました。印象に残った話題としては、中国北部の緑化政策として乾燥地域に農地・平野部・オアシスの森林ネットワークを構築し土壌と水の浸食を減少させ、砂漠化の抑制及び生産・生活の条件改善を行うとの発表がありました。当方からは「コウヨウザンの着花特性に影響する内的及び外的要因」について発表しました。

4. おわりに

各国際会議において、気候変動緩和・適応対策、生物多様性保全などの国際的な課題を踏まえた話題が取り入れられるとともに、その地域・分野における課題に対して最新の研究成果が発表されています。このことから、今後も国際会議に参加し、情報収集を行い、業務に活かしていきたいと考えます。

(指導普及・海外協力部 海外協力課 高濱 美樹、
育種部 育種第二課 木村 恵、
遺伝資源部 探索収集課 稲永 路子)